様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４３２００５９

研究課題名（和文）文学的交感の理論的・歴史的考察ー「自然ー人間の関係学」

研究課題名（英文）Theoretical and Historical Study of Literary "Correspondence": Reexamining the Nature-Human Relationship

研究代表者
野田　研一（NODA, Kenichi）

立教大学・異文化コミュニケーション研究科・教授

研究者番号：６０１４５９６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,100,000円

研究成果の概要（和文）：　「自然ー人間の関係学」の再構築へ向けた研究である。自然と人間、外部世界と内部世界、フィジックスとメタフィジックス、物理界と精神界、世界と自己などの対応や相関性を指す〈交感〉（correspondence）という概念を、文学における事象＝表象として再検討に付すと同時に、その概念の現在的有効性を文学以外の諸分野からのアプローチを参照することによって明らかにした。
　このような〈交感〉論を軸とする「自然ー人間の関係学」を歴史的に再検討し、その現在的意義を明らかにし、この概念を文学的表象論の枠内にとどめることなく、将来的に進められるべき「自然ー人間の関係学」の構築へ向かう研究の一環として位置づけた。

研究成果の概要（英文）：This research project aims to explore the nature-human relationship by paying attention to a specific literary device: the idea of “correspondence.” This idea, indicating the interrelatedness between the natural and the human, between the material world and the human mind, and between the world and the self, is historically reexamined as one of the most significant literary devices or tropes. In addition, this study attempts to assess whether this particular literary trope/device is still valid in contemporary literature and literary studies by referring to some approaches other than literary one. The idea of “correspondence” was fully formulated by nineteenth-century Romanticism and has been embedded as an implicit premise in many artistic works and genres. This research project has been completed by making explicit the historical and current siginificance of the idea of “correspondence.”

研究分野：環境文学・アメリカ文学、英米・英語圏文学

キーワード：交感　心的風景論　表象　エコクリティシズム　自然-人間学

１．研究開始当初の背景

(1)〈交感〉の思考は、古くはアニミズム、あるいは古代的なマクロコスモス/ミクロコスモスの対応・照応関係として認識され、所定のコスモロジーあるいは中世における「大いなる自然の連鎖」Great Chain of Being)として体系化されていたが、近代にいたるとともに、それは共同社会的なコスモロジーとしての役割を終え、著しく内面化・個別化され、ロマン主義詩学における根本概念として独自の「自然-人間の関係学」と美学＝文学思想を形成していった。ロマン主義にそのピークを見た、このような「自然-人間の関係学」としての〈交感〉の思想は、しかしながらロマン主義以降の現代文学の世界でも消失したわけではなく、ネイチャーライティングや環境文学にとどまらない、広範な表現様態＝表象として持続している。

(2)「自然-人間の関係学」は、地球環境問題の出現にともなって、再度クローズアップすべき課題として浮上しつつある。なぜなら、〈交感〉の思考には、本源的な「自然-人間の関係学」への人間のまなざしが深く刻み込まれ、自然環境との相互行為の歴史が心的・精神的志向性として保持されているからである。なかでも、ラルフ・W・エマソンの作品に代表される19世紀アメリカロマン主義の超越主義的思想における〈交感〉の原理は、物理的自然に象徴性を付与する表象装置として洗練され、後のアメリカ環境主義とその思想につながる自然観の変革をもたらした。また、〈交感〉の原理が人間とは何かという内的・哲学的問題へと想像力を引きつける磁場として、コミュニケーション論や環境論に接続する動きもみられる。

(3)〈交感〉は、文学における表象として広く認められるものの、学術的にはまだ十分な検証がなされているとは言いがたい。国内では野田研一『交感と表象』(2003年)、国外では Paul Shepard, *The Others:How Animals Made Us Human*(1996)、Arthur Versluis, *The Esoteric Origins of the American Renaissance*(2001)などヒューマン・エコロジー系あるいは隠秘学系の一連の著作が代表的な研究として挙げられる。また、文学以外では中沢新一『熊から王へ』(2002年）を初めとする一連の宗教学・人類学系の研究、今村仁司『交易する人間（ホモ・コムニカンス)』など社会思想史系の研究、および矢野智司『動物絵本をめぐる冒険』など心理・教育学系の研究などが、「自然-人間の関係学」をそれぞれの領域から再検討している。

(4)〈交感〉というテーマそれ自体への学術的関心は高くない。何故か。考えられる理由として、交感が〈自然との融合〉や〈世界との共鳴〉といった一体化幻想と同一視され、ひいては無批判で楽観的な自然カルトのイデオロギーと混同されて、文学的・思想的研究対象に足るものとみなされてこなかったことも一因であろう。もしそうだとすれば、〈交感〉を不当に貶めている一体化幻想とその構造を分析し、問題の所在を明らかにすることが求められねばならない。交感の文学的・理論的・歴史的諸特徴を検討・考察することにより、交感をめぐる誤謬や研究スタンスそのもののイデオロギー性をあぶり出すこともまた、本研究のねらいのひとつである。

２．研究の目的

（1）本研究は、「自然-人間の関係学」の再構築へ向けた研究の一環として位置づけられる。自然と人間、外部世界と内部世界、フィジックスとメタフィジックス、物理界と精神界、世界と自己などの対応や相関性を指す〈交感〉（correspondence）という概念を、文学における事象＝表象として再検討に付すと同時に、その概念の現在的有効性を文学以外の諸分野からのアプローチを参照することによって明らかにする。

（2）このような〈交感〉概念は19世紀ロマン主義において定式化されるに至ったが、その後の小説を含む文学表現において、いわば理論的前提として「埋め込まれる」(embedded)に至ったものである。本研究では、このような〈交感〉論を軸とする「自然-人間の関係学」を歴史的に再検討し、その現在的意義を明らかにする。また、この概念を文学的表象論の枠内にとどめることなく、将来的に進められるべき「自然-人間の関係学」の構築へ向かう研究の一環として位置づける。

３．研究の方法

研究期間は３年とする。年度ごとに段階的な目標を掲げ、研究の進捗と深化を図った。個別研究に加え、年２回合同研究会を開催し、関連分野の専門家を招くとともに、各人の研究進捗状況の報告と意見交換を行った。なお、2年目と最終年にそれぞれ研究の中間および成果報告を国内外の学会で発表した。得られたフィードバックを参考にしながら研究を進め、最終年には報告集を刊行した。これは最終的に論文集『交感幻想―環境と想像力』（仮題）として2015年度に刊行する予定である。

４．研究成果

3 年間の研究期間に次の(1)から(4)の項目について明らかにした。

(1)表象/記述様式論：文学実践における交感

① 記述様式としての交感のメカニズムと構造

② 一体化幻想の具体的事例の収集と分析

③ 交感における他者性の表象

(2)理論/認識論：交感論の理論的特徴
① アニミズムと交感の相違点と類似点
② 自然的事象の象徴化＝自然シンボリズムをめぐる哲学的・認識論的問題
③ 環境言説における交感の位置づけ
④ コミュニケション論における交感

(3)歴史/思想論：交感概念の歴史性
① スウェデンボルグおよびヨーロッパ思想界における交感の系譜
② ロマン主義とネオプラトニズムに交感
③ 日本文学における交感概念

(4) 現代的意義：交感のポストロマン主義的課題
① 表象から現存へ：脱超越論
② 交感と他者性の矛盾性
③ 環境教育・環境コミュニケーション論として定位

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）
① 野田　研一、自然を読むための 10 編−ネイチャーライティング入門、国立公園、Vol. 727、2014、pp.7−10

② 中川　僚子、Naming the Unnamable: Monstrosity and Personification in the First Japanese Translation of Frankenstein and its Illustrations, POETICA: An International Journal of Linguistic-Literary Studies、査読有、Vol.82、2014、pp.95−113

③ 結城　正美、Analyzing Satoyama: A Rural Environment, Landscape, and Zone、POETICA、査読有、Vol.80、2014、pp.51-63

〔学会発表〕（計 16 件）
① 結城　正美、Dystopia and Utopia in a Nuclear Landscape: Emerging Aesthetics in Satoyama, The Signs and Society Workshop, University of California, San Diego, U.S.A. California, San Diego、2015 年 2 月 17 日

② 結城　正美、Satoyama: Dystopia and Utopia in a Nuclear Landscape, ECOHUM seminar, Mid Sweden University, Sweden, Sundsvall、2014 年 12 月 16 日

③ 結城　正美、ジャガイモの「め」から見る人の世界−環境文学を手がかりに、ポテト・パースペクティブ、北海道大学、北海道札幌市、2014 年 8 月 24 日

④ 野田　研一、ネイチャーライティングの魅力、大連工業大学日本語学院（招待講演）、大連工業大学　中国・遼寧省大連市、2014 年 8 月 23 日

⑤ 野田　研一、文学的環境研究の可能性、2014 年度日本語教育日本研究国際学術検討会（招待講演）、広東外語外貿大学　中国・広東省広州市、2014 年 8 月 20 日

⑥ 喜納　育江、Decolonizing Home: Struggles for Recovering the Sense of Place in Okinawa, Island Ecologies Workshop（招待講演）、台湾師範大学、台湾台北市、2014 年 6 月 29 日

⑦ 中川　僚子、A Nameless Creature Personified: The First Japanese Translation of Frankenstein and its Illustrations, The North American Society for the Study of Romanticism (NASSR), University of Tokyo、東京都文京区、2014 年 6 月 14 日

⑧ 中川　僚子、人工/自然と怪物的なるもの−日本におけるメアリ・シェリー『フランケンシュタイン』の受容史から、第 19 回 ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会、白百合女子大学３号館 R3201、東京都調布市、2013 年 9 月 1 日

⑨ 喜納　育江、Surviving in Contact: A Border Theory for Okinawa、ALADAA: La Association Latinoamericana de Estudios de Asia y Africa、ラ・プラタ大学　Argentina, La Plata、2013 年 8 月 14 日

⑩ 中川　僚子、The Frankenstein Monster Translated/Transformed, ”Romantic Imports and Exports,” BARS Conference 2013、Lecture Room A, Nightingale Building University of Southampton, U.K., Southampton、2013 年 7 月 25 日

⑪ 野田　研一、里の不在：『もののけ姫』の衝撃、金沢大学付属図書館（環境学コレクション）公開シンポジウム里山×里海×文学(招待講演)、金沢大学角間キャンパス、石川県金沢市、2013 年 7 月 20 日

⑫ 結城　正美、里山ブームとは何か：風景、場所、ゾーン、金沢大学付属図書館（環境学コレクション）公開シンポジウム里山×里海×文学(招待講演)、金沢大学角間キャンパス、石川県金沢市、2013 年 7 月 20 日

⑬ 喜納　育江、「先住民」の商品化と文化的正当性〜ツーリズムとプエブロ先住民のアート、アメリカ学会第 47 回年次大会、東京外国語大学、東京都文京区、2013 年 6 月 1 日

⑭ 結城　正美、Post-Fukushima Literary Discourses on Food and Eating、East Asian Symposium on Literature and Environment、国立台湾大学、台湾台北市、2012 年 12 月 7 日

⑮ 野田　研一、ネイチャーライティングの魅力と可能性–太宰治にふれつつ、環境思想・教育研究会　研究大会、弘前大学教育学部、青森県弘前市、2012 年 9 月 30 日

⑯ 野田　研一、交感論の可能性をめぐって、環境/文化研究会、東洋大学文学部、東京都文京区、2012 年 8 月 25 日

〔図書〕（計　8 件）
① 野田　研一（単著）、水声社、失われるのは僕らのほうだ–自然・沈黙・他者、2015、300

② 喜納　育江、矢野　恵美、野入　直美、本村　真、大湾　知子、豊見　山愛、齋藤　実、竹下　小夜子、森川　恭剛、田中　寛二、村上　尚子、サブリナ・静枝・マッケナ、ティナ・タケモト、大月書店、沖縄ジェンダー学２ 法・社会・身体の制度、2015、313 (13-32)

③ 結城　正美、喜納　育江、 中川　僚子、（他 30 名）、勉誠出版、文学から環境を考える–エコクリティシズムガイドブック、2014、345（i-xiv，3-11，26-27，28-61，172-190）

④ 野田　研一、中川　僚子、結城　正美、喜納　育江、山田　悠介、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科　野田研一研究室、文学的交感の理論的・歴史的考察–「自然–人間の関係学」課題番号：24320059 成果報告書、2014、87 (10-27, 28-37, 38-48, 49-59)

⑤ 喜納　育江、赤嶺　正信、豊見　和行、大城　學、かりまた　しげひさ、石原　昌英、結城　正美、スーザン・ブーテレイ、崎山　多美、高嶺　久枝、リャン・イーピン、アパルナ・バハッタチャルヤ、大月書店、沖縄ジェンダー学　第１巻　伝統へのアプローチ、2013、288 (13-31,169-182)

⑥ 笹田　直人、野田　研一、山里　勝己、喜納　育江、結城　正美（他 29 名）、ミネルヴァ書房、アメリカ文化 55 のキーワード、2013、275 (4-7, 12-15, 20-23, 36-43, 88-91, 110-111, 140-143, 146-147, 168-171, 182-195，214-215，232-235)

⑦ 梨木　香歩、野田　研一、新潮社、梨木香歩『渡りの足跡』、2012、253 (245-253)

⑧山里　勝己、野田　研一、ベン・コバシガワ、ウェスリー・巌・ウエウンテン、ダーシー・タマヨ、与那嶺松一郎、フランク・スチュアート、大城立裕、仲程昌徳、管啓次郎、笹田直人、石原昌英、彩流社、オキナワ：人と移動と 21 世紀のグローバル社会、2012、217 (3-7，167-184)

６．研究組織
(1)研究代表者
野田　研一（NODA，Kenichi）
立教大学・異文化コミュニケーション研究科・教授
研究者番号：　６０１４５９６９

(2)研究分担者
山里　勝巳（YAMAZATO，Katsunori）
名桜大学・国際学部・教授
研究者番号：　８０１０１４５０

(3)研究分担者
結城　正美（YUKI，Masami）
金沢大学・外国語教育研究センター・教授
研究者番号：　５０３０３６９９

(4)研究分担者
中川　僚子（NAKAGAWA，Tomoko）
聖心女子大学・文学部・教授
研究者番号：　９０１９２６６６

(5)研究分担者
喜納　育江（KINA，Ikue）
琉球大学・国際沖縄研究所・教授
研究者番号：　２０２８４９４５